宇田川文海の人気作品と道頓堀上演

――続き物作家の思想と時代背景について――

相良　真理子

はじめに

宇田川文海は、明治前期から中期にかけて、大阪の新聞界と文学界に大きな功績を残した人物である[1]。宇田川は、一八四八年（嘉永一）二月、江戸本郷新町の道具屋伊勢屋市兵衛の三男として生まれた。彼は幼くして両親と死別し、一二歳の時に得度して駒込養源寺の小僧となった。出家して間もないころ、彼は師の南明和尚とともに水戸浪士に襲われ、顎に深い刀傷を負った。傷跡に悩んだ彼は、青少年期のほとんどを養源寺の侍者寮にこもり、ひたすら読書にふけったという。一八六六年（慶応二）満一八歳の時、下総華蔵寺の住職見習いとなったが、三年後の一八六九年（明治二）の暮れに還俗し、まもなく活版印刷の職工となった。一八七三年（明治六）に秋田県『遐邇新聞』の主筆兼印刷の職工長となった宇田川は、一八七五年（明治八）に神戸に移って『神戸港新聞』の記者となった。これ以降、明治一〇年代前半までに『浪花新聞』、『大阪新聞』、『魁新聞』、『大阪日報』の発行に携わり、これらの新聞に執筆していた。そして『魁新聞』廃刊（一八八一年）後間もなく朝日新聞社に入社し、『朝日新聞』紙上に作品を次々と発表して大阪のみならず東京までもその文名を響かせた。宇田川は一八八九年に大阪朝日新聞社を退社したが、翌一八九〇年（明治二三）春には大阪毎日新聞社に入社して、以後少ない年でも四編、多い年には八編もの作品を発表して活躍した。しかし、一八九〇年代後半になると宇田川の作品のような戯作風の小説は次第に衰退に向かっていった[2]。

彼は多くの作品を残したが、その中でも特に人気を博したのは、一八八三年（明治一六）一〇月から翌年一月まで、『朝日新聞』で連載された「勤王佐幕巷説二葉松」である。同作品は、『明治文学全集２明治開化期文学全集（二）』にも代表作として収録されている[3]。「勤王佐幕巷説二葉松」は、一八八四年三月から「若緑二葉松」として道頓堀戎座で上演され、その後一九二一年（大正一〇）までの三七年間、道頓堀五座を中心に大阪各地で上演され続けた。

この小説を取り上げた論文に大塚豊子「宇田川文海作『勤王佐幕巷説二葉松』について―明治初期の〝つづき物〟の世界―」がある[4]。大塚論文は、宇田川文海の「勤王佐幕巷説二葉松」を中心に、同小説が

描かれた時代背景を考察していた。その中で、「勤王佐幕巷説二葉松」は「尊皇思想を基調にした勧懲小説」とされており、「文海が『巷説二葉松』で、お家騒動とは言いながら、とくに勤皇、佐幕両派の内紛を捉え、尊皇思想を強調しているのは、当時の趨勢によるもの」であり、「保守を好む」庶民層は、政府の「皇室中心主義」に「同化し、順応」していったとしている。上演に関しては、一九〇七年（明治四〇）四月に刊行された、伊原青々園「新聞小説の変遷」の宇田川文海についての記述を引用して、「此人の作は多く場に上して盛況を得たが、中にも『巷説二葉松』の如きは新聞物の『忠臣蔵』と迄称せられて、芝居がはやらなくなると必ず之を出したものである。」という内容を紹介しているのみで、芝居の内容はもちろんのこと、人々の反応や劇評などに関しては一切触れられていない。[5] 大塚論文が引用した伊原青々園の記述は、昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第三十一巻の「宇田川文海」でも引用されている。[6]

一九三八年（昭和一三）一一月発行の『道頓堀』第一四四号に掲載された伊原青々園執筆の「大阪の俳優と新聞小説」には、「『大阪朝日』は小説もあれば、芝居そのほか軟かい記事があつて面白い。ちやうど友達の家が薬種屋なので始終「朝日」を取つて居て、読んだあとを貸してもらつた。」とあり、次のように記されている。

わたしの興味を引いたのは、続き物の小説であつた。宇田川文海氏が当時の花形作者であつたらしく、取り換へ引き換へ、その作が掲載されて、明日を待ちかねたものである。するとその小説がすぐと道頓堀の劇場で演ぜられて、どの役を誰がつとめるといふ報導が紙上に出る。舞台こそ見ないが、そういふ事で私は大阪俳優といよ〳〵馴染が深くなつた。

伊原の記述から、当時の宇田川文海の人気ぶりがよくわかる。さらに「文海氏の小説で最も面白いと思つたのは「巷説二葉松」で、芝居では戎座で演じて、宮津左京といふ役を延若がした。」とあり、次のように記されている。[7]

それから十年ばかり過ぎて、わたしはこの狂言を東京浅草の吾妻座で見た。（中略）その時、桟敷での話に、大阪ではこの狂言をすると何時でも大入を取るので、第二の「忠臣蔵」といはれて居るとの事を聞いた。

右の文から、「新聞物の『忠臣蔵』と迄称せられ」たとの「新聞小説の変遷」の中の記述は、青々園が東京の劇場の桟敷で聞いた話だったことがわかる。宇田川文海の「勤王佐幕巷説二葉松」は、新聞物の忠臣蔵と称されるほど、たしかに大人気を博したが、当時の大阪の人びとは、彼の作品とその上演のどこに魅力を感じていたのだろうか。本稿では、一八八〇年代後半から一八九〇年代の新聞や雑誌に掲載された作品評や劇評を丹念に追うことによって、その魅力の源泉に迫ってみたいと思う。

なお、宇田川文海が大阪朝日新聞社を退社した後、同紙上で小説を連載し人気作家となった渡辺霞亭は、「勤王佐幕巷説二葉松」の題材になった青松葉事件を別の視点から描いた小説「青松葉」を一九〇五年（明治三八）に『大阪朝日新聞』に連載している。この「青松葉」も道頓堀で上演された。本稿では、渡辺霞亭の「青松葉」にも触れながら、宇田川文海の初期代表作である「勤王佐幕巷説二葉松」と比較し、上演状況の違いを明らかにし、その背後にある時代性にも言及し

てみたい。

主に使用した史料は、『朝日新聞』、『大阪朝日新聞』、『大阪日報』、『大阪毎日新聞』、『大阪時事新報』、『演劇新報』[8]、『劇場珍報』[9]、『大阪演劇詳報』[10]など、当時の新聞、雑誌から収集した記事である。ほかに、『演芸画報』、国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表大阪編』第一巻から第六巻などを参考にした。[11]

一、「勤王佐幕巷説二葉松」の連載

「勤王佐幕巷説二葉松」は、一八八三年（明治一六）一〇月一六日から一八八四年（明治一七）一月二五日まで、『朝日新聞』に全六〇齣で連載された。[12]この小説の題材となったのは、幕末明治維新期の尾張藩内部で起こったいわゆる青松葉事件である。[13]

青松葉事件とは、幕末の尾張藩士の一斉処刑事件である。尾張藩主の父として事実上藩の権力を握っていた徳川慶勝は、大政奉還後も公武合体を主張していた。一八六八年一月三日の鳥羽伏見の開戦後、事実上の公武合体の崩壊とともに尾張藩は立場を明確にするよう迫られることになった。東海地域の諸藩の動向は、この地域が政治的にも軍事的にも重要な位置を占めており、大藩である尾張藩の動きは、天下の動向を左右するとして注目されていた。同年一月七日、慶喜追討令が出され、都にいた慶勝は一月一四日に急遽帰国の命を受けて一月二〇日に帰城、即日佐幕派と目されていた家老渡辺新左衛門ら三名が斬罪に処せられた。さらにその後数日のうちに佐幕派とされた人物が次々と斬罪に処せられた。この事件の中心人物とされた渡辺新左衛門が「青松葉」と呼ばれていたため、この事件は青松葉事件と呼ばれた。佐幕派と目されていた人物を処分することで藩論を倒幕に統一していることを内外にアピールするための手段としてこの事件が起こったと考えられる。しかし、現存する資料が少ないため未だに詳しいことはわかっていない。[14]

宇田川文海は、青松葉事件を「勤王佐幕巷説二葉松」の中でどのように描いているのだろうか。彼の作品の筋書きから見ていくことにしたい。

大政奉還以後、勤王派と佐幕派に割れた藩論は、伏見鳥羽の開戦で紛糾していた。藩主は殿中で会議を開き、佐幕派の筆頭若松三左衛門と勤王派の筆頭宮津左京に意見を述べさせる。はじめ、若松三左衛門の論述の巧みさに「藩論や、佐幕に傾くべく見え」たが、宮津左京の勤王論によって、藩主は勤王論を支持し、「諸士も能く心して必ず心得違無きやう」と諭して退出する。[15]不快を露わにして退出する若松三左衛門は、「陽に其説を唱て藩士の心を傾け陰に国家を横領」[16]しようとする「八逆の謀反人」[17]であった。三左衛門の差し金で藩主は命を狙われるが、藩主を庇った愛妾お梅が死亡する。藩主はその頃から酒色に溺れだす。見かねた忠臣宮津左京と左京の娘の婚約者青山小三郎は、藩主を諫めに行くが、左京は謹慎、小三郎は手打ちを言い渡され縄をかけられてしまう。しかし、近臣を下がらせた藩主は、小三郎の縄をほどくと、本心を語り始めた。酒色に溺れているように見えた藩主は、実は勤王派で、佐幕派の目を欺くために酒色に溺れているふりをしているだけだった。藩主の命を狙っている人物やその黒幕をさぐるよう密命を受けた小三郎は、髪結い床主人に成りすまして情報を集

めて活動する。一方、若松三左衛門の手下松田文吾は、密命を受けて左京の暗殺に向かう。しかし、左京の志が「朝廷に対し本藩に対し飽迄深き忠肝義胆」であったので、「感嘆の余り」「吾身の非」を知り、若松を説得するとして屋敷に帰る[18]。若松が目を覚ますとそこには文吾の切腹した遺体と、諫言の遺書があった。遺書を読んで改心した三左衛門は、殿中評定の場に行く前に切腹し、腹を切った状態で藩主に詫び、そののち喉を掻っ切って自害する。陰謀に積極的に加担した人物は処分され、藩論一致して勤王の正義に邁進し、藩主はじめ左京や小三郎は明治維新後も重用された。

宇田川文海は、渡辺新左衛門らの処刑という歴史的事実に、お家横領の陰謀という脚色を施し、新聞の連載小説に仕立てたのであった。

この小説では多くの人物が登場し、それぞれ話の伏線となる挿話がちりばめられている。たとえば、許嫁がありながら藩主の妾に選ばれる宮津左京の娘文子や、それを哀れに思い勘当という形で文子を逃がして自害する宮津左京の後妻竹川、若松三左衛門の企みにより藩主を父の仇と思いこんで藩主の命を狙う妙子などである。若松三左衛門の腹心松田文吾は、鳥羽伏見の戦いで幕府軍として戦うが敗走し、自害しようとしたところを若松三左衛門に助けられ、命の恩義から三左衛門の悪事に手を貸す。だが彼は、後に宮津左京の思慮深さに感激し、若松三左衛門が切腹するきっかけを作った。これらの人間関係が相互に絡み合いながら話が展開していく流れは、今日においても読者を引きつける面白さがある。

連載時の読者の反応はどのようなものであったのだろうか。連載中、一八八三年（明治一六）一〇月三一日から一一月二〇日まで作者病気のためと称して休載している時期がある。『朝日新聞』同年一一月一一日付には、次のように記されている。

病気今以て快方に至らず猶此一週間ばかりも経ざれば執筆の労に勝へざるに付愛顧深き看客よ仰ぎ希くハ今数日の猶予を借されんことを決して前号打岸波花月親話篠の小薄等の如きドロン〳〵を学びて中途に立消するものにあらず執筆者の病気実に止むを得ざればなり近日看客より屢々書を寄せて之を促がさるゝもの〻多きに由り重ねて此に一言す

右の文中の「屢々書を寄せて之を促がさるゝもの〻多き」というところに、次号を待ち望む読者の反応が見て取れる。休載直前の第一二齣は宮津左京と青山小三郎が藩主を諫めに行く場面で、左京と小三郎が意見を述べるところで終わっており、藩主の反応は次回に持ち越されているため、読者が次号を心待ちにしていたことが推測される。この休載報告が掲載されたのは一一月一一日で、休載から一〇日程の間に「屢々」投書があったということである。

さて、「勤王佐幕巷説二葉松」の中で、勤王派と佐幕派はどのように描かれていたのだろうか。新聞に連載された小説の本文の中から佐幕派、勤王派に関して記されているところを見ていきたい。

『朝日新聞』一八八四年一月一九日付宮津左京の独白の場面で、一般的な佐幕派を「武門に生長する者数百年の習慣」によって、「見易き大義を弁ず了易き名分を明ざるを奇貨として故と佐幕説を唱る」としている。また、同小説の中で登場している若松三左衛門らは、「此時を幸ひに朋党を結び其勢に乗じて主家を横領せん奸謀邪策」を張り巡らせる人物として描かれている。そして、佐幕派について、藩

主重信に以下のように語らせている。[19]

今日の時勢に当り尚幕を佐るを正道と心得栞に膠し株を守る大義に暗き愚人ハ姑く置き陽に佐幕を唱へ陰に異図を企る奸臣原ハ暗に喜悦の想を為し之を機会に予に道ならぬ事を勧る

ここでも、一般的な佐幕派を「栞に膠し株を守る大義に暗き愚人」とし、小説の中の佐幕派を「陽に佐幕を唱へ陰に異図を企る奸臣原」としているように、一般論と小説内での佐幕派イメージの二つが併記されている。また、「栞に膠し」という言葉は、宇田川の著作である「朝桜日本魂」の佐幕派の描写にも登場する。[20]『朝日新聞』一八八五年（明治一八）一月一七日付に、「因循頑愚の心より時の勢ひの如何を知らず只幕府の鼻息をのみ維窺ひ其怒にさへ触るゝ無ば我藩を維持する上策と心得却て其事よりして我藩の危急を生ずる事に思ひ至らぬは所謂琴柱に膠する謬見といふもの」という記載がある。やはり、ここでも佐幕派に対して「琴柱に膠する」という言葉を使用しており、この言葉が宇田川の小説における佐幕観を表す言葉なのだと考えられる。

「若緑二葉松」の戎座上演が決定した後、若松三左衛門の配役について、一八八四年（明治一七）三月八日付『朝日新聞』に次のような投書が紹介されている。

此二葉松の役の中若松三左衛門を荒五郎が勤る由なるが全体三左衛門ハ此物語の内にて宮津左京と伯仲の人物なれバ左京を延若が勤れバ三左衛門を宗十郎が勤めねバ一部の物語の趣向を無にする道理狂言にてハ如何なる脚色に変しか知らねど若三左衛門を尋常の敵役に書しなれバ夫迄の事然し夫なれバ二葉松の精神ハ腐敗たりといふべし

「若三左衛門を尋常の敵役に書」いているならば、「二葉松の精神ハ腐敗たり」と記されており、若松三左衛門はただの敵役ではなく、この小説の魅力の一つであったことがわかる。

また、青山小三郎と連れだって藩主に諫言した宮津左京は、藩主によって謹慎を命じられた。藩主は、その理由を「名望といひ学識といひ吾藩の良臣勤王党の領袖たれば若奸党の為に暗殺さるゝなど不測の過失あらんを恐るゝ」ためだとしている。[21]宮津左京のモデルと考えられる田宮如雲は、実際に安政の大獄の際、慶勝とともに謹慎している。[22]宇田川文海は、この田宮如雲の謹慎という事実に、忠臣暗殺を防ぐための計略という脚色を施していたのである。

「勤王佐幕巷説二葉松」では、古い体質を持つ固陋な佐幕派を、新しい思想を持った開明的な勤王派が打ち破る姿が描かれていた。同小説は、単純に勤王対佐幕の勧善懲悪物語、皇室を絶対視するための物語ではなく、古いものを切り捨て、新しい時代を肯定する内容が描かれたものであった。佐幕派を「琴柱に膠する」ものとの作中の記述は、近代化への歴史の動きに目を向け、明治前期を生きてきた宇田川文海自身の思想を表現したものといえよう。「二葉松」が連載された明治一〇年代後半の大阪は、企業勃興期に当たっており、二〇年代から本格的に始まる産業革命の初期であった。まだ古い街並みを残しながらも、古い時代を脱ぎ捨て、近代国家として歩みだしたその時期に、このような小説が人気を博していたのである。

二、「若緑二葉松」の上演

「勤王佐幕巷説二葉松」は、一八八四年（明治一七）三月二七日から、大阪道頓堀の戎座で「若緑二葉松」という演目で上演された。[23]『劇場俳優人名番附』第一六〇号によると、戎座での主な出演者は、宮津左京が初代実川延若、藩主重信が初代中村宗十郎、若松三左衛門が三代目市川荒五郎、娘妙子が四代目嵐璃寛、松田文吾が四代目嵐橘三郎、青山小三郎が三代目実川延三郎である。[24]狂言作者は勝能進、勝諺蔵、奈河忠鳳、佐橋玉助、並木正三であった。[25]

『朝日新聞』一八八三年（明治一六）一二月九日付には、「道頓堀戎座の芝居ハ来十七年一月一日より昨今陸続弊社にて筆を取て居る二葉の松を興行するといふ」と、予告が掲載されている。同紙にはその後、一八八四年一月二五日、二月二二日、二月二七日、三月二日、三月七日、三月二二日に上演情報が掲載され、日程の延期や配役などが報じられた。何度も延期になった戎座芝居は、「近来稀なる大人気にてまだ初日のいでぬ内より客先より申込多く最早五日目までハ場桟敷とも上場ハ売切の勢ひ」と、上演前から申し込みが殺到したほどの盛況ぶりであった。[26]

『朝日新聞』一八八四年三月二九日付には、次のように記されている。

一昨日戎座劇場（しばい）初日の景況ハ予て待設けたる市中の人々吾を先と押出せしことなれバなか〳〵の上景気又一座の俳優も為に数日初日を延せし程稽故に身を入し丈ありて言語廻（せりふ）し身の回旋（こなし）共に能熟し舞台も場も両（ふたつ）ら初日とハ思ハれず此勢ひにてハ今度の演劇ハ二葉松の若緑り弥栄に栄えなん

「吾を先と押出」すほどに待ちかねた人々の様子が記されたあと、「戎座の劇場ハ狂言の面白きと俳優（やくしゃ）の顔揃ひとを以て近来稀なる人気を得し」と、人気の理由も報じられた。[27]「若緑二葉松」は、その後も人気が衰えず、『朝日新聞』同年四月一七日付で「戎座は近来稀なる大人気に付来る廿五日まで日延興行する」と二五日までの日延予告が出てすぐ四月一九日付の広告欄には二七日まで日延べする旨の戎座の広告が掲載された。また、『日本立憲政党新聞』同年四月二五日付には、「道頓堀の戎座の芝居ハ開場より殊の外の人気にて今に猶ほその入の落ちざる程なるに付今廿五日の揚り高は総べて一座中へ祝儀に出す筈なりとか又同座が今度の一芝居の儲け高ハ殆んど七千円の多きに及びたりといふ」と報じている。[28]

では、どのような形をとって上演され、どの場面が人気を集めていたのだろうか。一八八四年三月に出版された『演劇新報』第一号、同年四月に出版された『劇場珍報』の筋書きの内容と『朝日新聞』に連載された宇田川文海の小説「勤王佐幕巷説二葉松」を比較すると、話の筋は同じであったが話の展開には違いがあった。たとえば、松田文吾が宮津左京暗殺のために彼の屋敷に忍び込む場面で、小説では文吾は左京の独白を聞いて感激し、自らの非を認めて自害しようとするところを、左京に止められその場での切腹は思いとどまり、若松三左衛門の屋敷に帰った後、彼を説得するために自害して果てるという筋になっている。しかし、前掲『演劇新報』第一号には、「八幕目」「宮津左京屋敷の場」が次のように記されている。すなわち、松田文吾は

「白刃を引さけた儘二重へ上り左京の後へまわり白刃を上段にかまへ隙を狙ひ居る左京ハ前の塗机に怪しき姿の写るに一寸後を見る此途炭文吾ハ無言にて切付る左京心得へ身を開きて机の上なる如意」をとって身構える。そして、激しく刀を交えた後、左京に押えつけられた文吾は、自分の身の上を語り、「若松三左衛門が徒党を集る連判状」を左京に預けて切腹するという筋になっている。劇中では、文吾が三左衛門を諫めるために切腹する場面はない。三左衛門は自らの非を悟って自害するのではなく、左京ら忠臣に追い詰められて切腹するのである。このように上演の「若緑二葉松」には、話の筋には直接関係ないが、見せ場を作るために書き足されている場面が随所に登場し、その代わりに削られた場面も多くある。松田文吾と左京が激しく斬り合う右の場面も、観客を引きつける見せ場の一つになっている。『劇場珍報』は、「左京の書室に松田文吾切腹の場」は「作者のはたらきにて頗る腕に実の入る」場面であったと記している。[29] また、『劇場珍報』には、「梅林の場」として次のような記述がある。

大勢の近習供廻りも皆花道へは入る跡に藩主と三左衛門のこり是より藩主ハ謡ひを諷ひながら花道の中途迄三左衛門と倶に徐々ゆく其うしろ蔭を女六部の妙子が狙撃して又も撃そんじる件よろ敷夫より藩主ハ又難波の謡ひを諷ひながら揚幕の方へゆく其又後ろより三左衛門が藩主を唯一刀に斬さげんと付狙ふ此見得よろ敷所謂幕外にて看客をよろこばす大評判の一段なり

この梅林の場は、この後も劇評で度々登場し、高い評価を得ている。若松三左衛門は梅見の酒宴で藩主重信に毒を盛るが、土壇場で酒に毒が入っていることが露見し、三左衛門の策略によりその罪は膳番の若い藩士になすりつけられる。評価が高いのは、この酒宴が終わった後、帰ろうとする藩主を後ろから若松三左衛門と妙子が狙うという場面である。「看客をよろこばす大評判の一段」というところからも、人気の場面であったことがわかる。緊張感のある場面で謡を取り入れ、夕月を浮かばせるという、観客の視覚、聴覚に訴える演出が施されていることがわかる。『朝日新聞』に連載された「巷説二葉松」では、梅林の酒宴で若い藩士が捕えられるところで場面が変わっており、この謡の場面はない。芝居を効果的に見せる演出のために、この場面が挿入されたと考えてよい。[30]

次に、これ以降の上演の様子を見ていきたい。

一八九二年（明治二五）四月一日から二〇日まで「若緑二葉松」は、弁天座で上演された。一八九二年四月に刊行された『大阪演劇詳報』第三〇号には、「弁天座一口評」が掲載されており、「梅林の場」は、次のように評されている。

（彦三郎）若松三左衛門、立敵と云ふ役廻り何と云つても此一座では此優へ持て行かねばならぬ役押出しは随分憎体にて敵役には相違なけれど三左衛門の志慮に乏しきと挙動の荒々敷とは能く役の呑込めぬものならん梅林にて近習を先に帰し藩主の後に随ひ刀の柄に手をかけ後ろより覗ふ様悪るい〳〵併も一度重信の目に留りトゞやり過して柄に手を掛けての引込みは汗が出ました

「宮津左京屋敷の場」については次のように記されている。

（卯三郎）宮津左京、彦三郎の三左衛門とよき釣合の家老職、其言ふ所は忠臣無二の老職なれど容貌は敵き役に近くして御家を窺ふ奸臣は何れか分らぬ位勿論品格もなく此優には至極不適当の役

にて唯見るべきは松田文吾が忍び来り切掛る際の立廻りは中々烈しく見栄せしも其他は大の不の字役の付かぬは斯程まで違ふものかと思はれたり

右の記述から、いずれも役者評はあまり良いものではなかったが、「梅林の場」では手に汗を握り、「宮津左京屋敷の場」では立廻りの激しさに魅せられたことがわかる。

一八九三年四月一日から二五日までは、朝日座で上演された。『大阪毎日新聞』同年四月四日付の「朝日座の略評」には、「梅林の場」が次のように記されている。

延三郎の藩主重信は頗る上出来、梅林の這入（ひきこみ）に花道での謡はなか〳〵落着たもの、殊に三左衛門が後より狙ふを謡曲（うたい）にまぎらして注意する処トゞ揚幕の処に至りて笑ふ処などは甘（うま）いものなり

『大阪朝日新聞』の一八九三年（明治二六）四月七日付の「朝日座一口評」は、次のようなものであった。

（延三郎）の藩主重信立派な殿さまなるが土壇場に胴服を着たとは延気（のんき）過て悪し矢張り宗十郎の形に従ひ黒羽織の事なるべし、梅林の道具建大張込には看客の眼を驚し花道の引込みに道具幕を引き夕月を照らせし仕掛などは最も受たり

藩主重信役について、九年前の戎座上演での中村宗十郎と比較されている。劇評では度々、戎座での上演と比較されており、一八八四年の道頓堀での初上演が基準になっていることがわかる。また、右の劇評からは、藩主重信役の実川延三郎の芸、梅林の場の大道具や仕掛などが受けていたことがわかる。

一八九三年一一月一日から二〇日まで角劇場で上演された「若緑二葉松」の主な出演者は、藩主重信が三代目片岡我童、宮津左京が三代目中村福助、若松三左衛門が片岡我蔵、青山小三郎が嵐巌笑、松田文吾が初代中村鴈治郎、妙子が尾上多見之助であった。[31]『大阪朝日新聞』同年一一月一二日付に、「角座略評」として「霞の家主人」が劇評を書いている。その中で、「前狂言の若緑二葉松といふは先刻御承知の通り朝日新聞の続物を諺造子が脚色（しぐ）みたるお家もの書下しの時は故人宗十郎延若を始め大阪役者の粋と言はるゝが役々を勤めて近来稀有の大入大当りを取りたるものゝよし」と一八八四年の戎座上演の人気ぶりが紹介された。この時期には「先刻御承知の通り」と、よく知られた演目となっていたこともわかる。さらに、劇評として次のように記されている。

我童の藩主重信公当時此地にては此優の外あるまじ何故に左ほどまで三左衛門を憚り玉ふのか其辺はきと分らねど表に佐幕と見せかけて心に勤王の大義を抱く大名苦心のところ十分に見えてよし

四幕目梅林の場にてうしろに三左衛門の刃抜きかゝるを知りながら蹌々跟々（ひょろひょろ）謡をうたひての引込まで見物は大うけなり二役青山小左衛門は確かなもの、福助の宮津左京かく堅くなり過ぎて今一息軽妙の場に至らず始終の動作（しぐさ）上出来とは言はれねど今度新たに書足せしとかいへる閉門閑居の場にて鴈治郎の松田文吾との激闘言ふばかりなく面白かりき

「梅林の場」は三左衛門が「刃抜」きかかるのを知りながら「蹌々跟々謡をうたひての引込まで」が「大うけ」であった。また、宮津左京と「松田文吾との激闘」は「言ふばかりなく面白かりき」と記されている。「閉門閑居の場」を「新たに書足」したというが、どこをど

のように書き足したのかは角座上演分の台本が残っていないためわからない。一八九六年（明治二九）に出版された勝諺蔵『演劇脚本勤王佐幕若緑二葉松自大序至大詰』では、前掲『演劇新報』第一号とほぼ同じ内容が記されていた。

さらに、「さて入らぬことながら見物の多くは此芝居を尾州家の騒動と思ひ若松三左衛門を渡辺新左衛門宮津左京を田宮如雲ならんなどいふものあれど甚だ謂はれなき事なり新左衛門の事は評者故ありて善く知れど決して芝居で演るやうな人物にはあらず序なれば一言し置く」とも記されている。「霞の家主人」とは、渡辺霞亭のことである[32]。一九〇五年（明治三八）に青松葉事件を題材にした小説「青松葉」を発表した渡辺霞亭は、一八九三年一一月の角座での上演を見ていたのである。渡辺新左衛門について、「決して芝居で演るやうな人物にはあらず」という言葉に霞亭の考えが表れており、「青松葉」という小説が発表される一〇年以上前に『大阪朝日新聞』にこのような記事を書いていたことは興味深い。

「若緑二葉松」は、明治一〇年代後半から明治二〇年代にかけて人気を博した様子が劇評などからわかるが、明治四〇年頃からその評価に変化が生じた。

一九〇九年（明治四二）には、四月一五日から五月三日まで中座で「二葉松」が上演された。『大阪朝日新聞』四月二一日付の「中座の「二葉松」（上）」には、最初の上演から二五年も人気を保ってきたのは「不味い処は切り捨て」、「味い処だけを見せ」るように改良されてきたからであり、「幕ごとに変化ありて罪の無い華麗な物」、「花見時には肩が凝らいで可し」と、視覚的に派手で気軽に見られる娯楽性の高さが人気だと記されている。一方、『大阪時事新報』同年四月二一日付「中座の扇若劇」には次のような記述がみられる。

「二葉松」は新聞小説を劇に脚色した元祖だといふ、其当時大朝紙上に掲載されたのを延若、宗十郎、璃寛などが演じて大当りを取つたものだといふ事だがそれを改良もせずに上場したものか、今日では余り陳套に過ぎて失笑せしめる個所も往々ある

明治後期の劇評をみていくと、日露戦後あたりから「二葉松」の内容は人々の好みに即さなくなっていたようである。

その後、一九一一年（明治四四）四月に玉造座、一九一二年（明治四五）二月に松島八千代座、一九一五年（大正四）三月堀江座、一九一七年（大正六）六月北劇場、一九二一年（大正一〇）五月松島八千代座と「若緑二葉松」の上演は続くのだが、一九〇九年の中座を最後に道頓堀五座で上演されることはなく、劇評が取り上げられることもなくなった。

「若緑二葉松」の大阪での上演は、一八八四年から一九二一年まで確認できる。この三七年間で合計二八回上演され、ほぼ毎年、もしくは一年おきから二年おきに上演されていた。一八九五年（明治二八）から一八九八年（明治三一）の四年間は上演が確認できないが、それ以外は定期的に上演されている。上演月は四月が七回と最も多く、次いで一月の五回、三月の四回であった。三月と四月を合わせると一一回となり、春の公演が全体のほぼ三分の一を占める。華やかな時期に相応しい演目だったのだろう。

一九三八年（昭和一三）一月に出版された『演芸画報』第三十二年第一号に掲載された食満南北執筆の「大阪での顔ぞろひ」には、その

魅力の核心に触れるような記述がある。食満南北は、「若緑二葉松」の上演を「故鴈治郎、故仁左衛門—当時我童—、故梅玉—当時福助、故多見蔵—当時多見之助、故巌笑などの所謂大一座で演じた」時に観劇していて、「本当に芝居は面白いと思つた。」と記し、次のように述べている。

お客であつた私は、場—東京でいふ土間—に座つて見物した。鴈治郎も亦若かつた、小柴の又市、妻竹川、松田文吾の三役とも実にうれしかつた。さうして故我童の藩主重信といふものが又素敵にうまかつたものだ。梅玉の宮津左京にやゝ異論はあつたが芝居の面白さにグン〳〵引ずられて、梅ばやしの場など今も眼にのこつてゐる。重信が花道へゆら〳〵と謡をうたひながら行くうしろからは我蔵の若松三左衛門が刀の柄をにぎつた市原野の保輔の型でついて行く、舞台一面の白紅梅の間からは妙子の多見之助が短銃をもつてうかゞふといふ実に芝居の定石のやうな場面に本当にウツトリしたものだ。今から考へて見ると聊か妙な芝居ではあるが其頃は何かなしに、こんな立派な役者ぞろひで、しかも各々がピツタリとはまつてゐるので、幕毎によだれをたらしたものだ、しかも幕の一つ一つに山があつて、それが一々大芝居になつてゐる

続いて、「どんな顔ぶれでもよい二葉松が観たい。」と記し、この芝居を観たのは「何年前のことか、恐らく私が十七八の頃ではなかつたらうか。」とも書いている。右の文中に記された配役とほぼ一致するのは、一八九三年（明治二六）一一月の角劇場での上演である。食満南北は一八八〇年（明治一三）の生まれなので、一八九三年には満一三歳であり、「十七八の頃」というのは少しずれがある。彼の数え年「十七八の頃」にあたる一八九五年から九八年までの間に「若緑二葉松」の上演は見当たらないから、数え十四、五歳の頃に見たものと考えて間違いなかろう。

右の劇評から、二葉松の視覚的な美しさと娯楽性の高さがうかがえる。これまで見てきた劇評からもわかるように、うっとりとするほどの華やかな美しさと年を経るごとに場面の取捨選択がなされ、さらに娯楽性の高い作品に仕上がっていったことによって「二葉松」は長く大阪の庶民に愛されたのだろう。鑑賞後四〇年以上経った後にもこれだけ記憶に残っている舞台であったのである。そこには、日本の資本主義形成期の大都市大阪の市民の嗜好が反映されていたとみてよい。さらには、明治二〇年代におけるロマン主義の登場と同じ社会的背景をみてとることができるのである。

三、渡辺霞亭の小説「青松葉」の上演

宇田川文海が大阪朝日新聞社を退社した後、『大阪朝日新聞』で連載小説を次々と発表し文名を馳せたのが渡辺霞亭であった。

渡辺霞亭は、宇田川文海の「勤王佐幕巷説二葉松」のモデルとなった青松葉事件を題材にした小説「青松葉」を、一九〇五年（明治三八）七月一三日から同年一一月九日まで『大阪朝日新聞』に七三回にわたって連載した。その序文の中で霞亭は、次のように述べている。

二十年前より弘く坊間に行はるゝ「巷説二葉の松」の事蹟を取りて、維新前に起りたる尾州徳川家のお家騒動なりと思ふ人あらば

大いなる間違なり、彼の小説の作者は尾州藩のお家騒動として筆を取りたるべけれど、黒白混同事実顛倒の事ども少からず、われ此度この事件の新事実を探りて、所謂「実録」を掲ぐるに当り、このお家騒動の起原、関係、藩中当時の光景を略記して、まづ読者の注意を惹き置かん。

右の文中の「二十年前より弘く坊間に行はるゝ『巷説二葉の松』」とは、宇田川文海の「勤王佐幕巷説二葉松」のことを指している。前にあげた「若緑二葉松」の劇評の中でも霞亭が述べていたように、宇田川の「二葉松」の叙述に対して、自己の血縁との関係から心よく思わないところがあった。

渡辺霞亭は、本名渡辺勝といい、一八六四年（元治一）一一月、尾張国名古屋主税町に生まれた。大阪朝日新聞社に入社する前は、『岐阜日日新聞』、『金城新報』、『めざまし新聞』などで連載小説を発表していた。一八九〇年（明治二三）六月、『大阪朝日新聞』に招かれて後は次々と長編小説を発表した。現代物、時代物に渡って長中編小説を多数発表し、『大阪毎日新聞』の菊池幽芳と並び称された。[33] 霞亭の生まれた渡辺家は家老の家柄で、「巷説二葉松」の若松三左衛門のモデルであり青松葉事件で斬罪に処せられた渡辺新左衛門は、霞亭と血縁関係にあった。一説には伯父といい、一説には祖父といい、父親であったとする説もあるが、詳しいことはわからない。[34] 渡辺新左衛門にゆかりのある渡辺霞亭は、小説「青松葉」の中で、尾張藩の青松葉事件を次のように描いていた。

尾張藩では、安政の大獄で慶勝が隠居謹慎処分になり、その弟玄同が家督を相続した。玄同は開国派、前藩主慶勝は攘夷派で、開国派の中心人物は渡辺新左衛門、攘夷派の中心人物は真宮弥太郎であった。真宮一派は「渡辺新左衛門が玄同公に取り入りて、武者奉行の要職に立」っているのは、前藩主慶勝「御幽閉中を幸ひお家を横領せんづる策略」であるとして、開国派に「お家横領の謀叛あり」という流言を流していた。真宮一派は渡辺一派反逆の連判状を偽造し、京都の岩倉具視に届ける。それを見た岩倉は慶勝に朝廷の命として渡辺一派を死刑に処するよう命じる。慶勝は「たゞ主義の相違に由つて、善となり悪となる、殺すは惜しき者なれど、朝命なれば止むを得ず」として、渡辺新左衛門一派に死を命じ、渡辺新左衛門は斬罪に処せられる。[35]

「青松葉」には、宇田川文海の「勤王佐幕巷説二葉松」と故意に合致させていると思われるところがある。「巷説二葉松」の若松三左衛門の陰謀と、「青松葉」で真宮一派がでっち上げた渡辺新左衛門の陰謀である。若松三左衛門は、藩の権力を手中に入れるため、藩主を酒色で惑わし意のままに動かした後毒殺し、藩主の息子を殺害して自分の息子を藩主にし、藩を横領しようとする大奸物として描かれていた。それに対して「青松葉」では、真宮弥太郎の息のかかった藩士が偽造した渡辺新左衛門の密書の内容として、次のような記述がある。[36]

玄同侯は御弱年、酒色を御勧め申し上げ候やうに致し候はゞ、此の侯の御命も長かるまじと推察仕つり候、慶勝様玄同侯この御二方さへ無き者に致し候はゞ後は我等の天下と相成り申すべく、さ候節は直に元千代様を御家督に立て参らせ、一国の政、掌の中に握り候はん、その時は一期の本懐、貴公とても立身出世思ひのままたるべく、乍此上御油断なく御見張り、玄同侯御身持ち惰弱に流れ給ふやう、随分酒色を御勧めなさるべく、密々申し進じ候尚

先日御談じ申し上げ候一条の儀、追々捗取り候間、時宜に由らば
右一薬を以て一刀両断の処置相付け候ても宜しく

酒色を勧める点、一国の政を掌中にしようとしている点、毒殺しようとしている点が、「巷説二葉松」で描かれている若松三左衛門の企みと一致している。渡辺霞亭は、「二葉松」での若松三左衛門像は、攘夷派がでっち上げた嘘を基にしていると主張し、これまでの渡辺新左衛門像を覆そうとしたのである。また、物語の後半に出てくる岩倉具視に渡る偽の連判状にあたるものは、宇田川文海の「巷説二葉松」には登場しない。しかし『演劇新報』第一号、『劇場珍報』、『演劇脚本　勤王佐幕若緑二葉松　自大序至大詰』の八幕目、松田文吾が左京の言葉に感激し切腹する場面に登場する。このことから、渡辺霞亭は、芝居「若緑二葉松」も念頭に置いて書いたのだということがわかる。先に挙げた『大阪朝日新聞』一八九三年一一月一二日付「角座略評」からも、渡辺霞亭が「若緑二葉松」を観ていたということがわかる。

「青松葉」は、同名「青松葉」として連載が終わる直前の一九〇五年（明治三八）一一月一日から角座、弁天座、福井座、明楽座で上演され、一一月中が初日の上演だけでもほかに稲荷文楽座、天満座があり、一二月に入ると「当世青松葉」や「新青松葉」として朝日座、平林座、弥生座、繁栄座で上演されている。[37]「青松葉」が角座と弁天座で一九〇五年一一月一日から同時に上演された際は、当時の二大人気俳優であった中村鴈治郎、三代目片岡我当が弁天座、角座の二座に分かれ、脚色と演技の腕比べをした。この比較評が新聞や雑誌に掲載されていた。『大阪時事新報』では同年一一月一〇日から一二日までの三日間、「顔見世評判記」に「青松葉」の劇評を掲載し、『大阪朝日新聞』では、一一月一一日から一五日までの間に四回に渡って比較評を掲載した。『大阪朝日新聞』同年一一月一一日付によると、「角座の脚本は出来るだけ原作の筋に拠らんとしたる形跡あれど」、「あまりに突飛にして見物は呆気に取られたる様ありされど此の座の脚本は仍幾分の生命あり弁天座に至りては殆ど小説の精神精髄を没却」していると記している。そして、「以来小説を脚色せんとする者は小説を読まぬ人には解し難く小説を読みたる人には呆気なきやうの無理なる脚色を為さゞるやうに望み置くなり」としており、「青松葉」は脚本の評判があまりよくなかったことがわかる。それでも客足は良かったようで、「角座も好景気なり弁天座を見たる者は角座を見、角座を見たる者は弁天座を見、双方を比較するが多く日々宵付客多しといふ[38]」とあり、連日大入であった様子が報じられている。

同年一二月一日からは、「青松葉」を「当世物（大華族の内事として）に書直し[39]」た新派劇「当世青松葉」が朝日座で上演された。出演者は福井茂兵衛、秋月桂太郎ら天満座、朝日座を拠点として日露戦争前後に全盛時代を築いた新派俳優であった。[40]朝日座での上演は好評を博し、『大阪朝日新聞』同年一二月一三日付に「朝日座は「当世青松葉」の評判極めて好く昨今益好景気」と報じられている。この朝日座での上演以降、「青松葉」は一九〇五年一二月から翌年一月にかけて、平林座、弥生座、繁栄座において、さらに一九〇七年（明治四〇）五月に弥生座で上演されるが、その内容は平林座を除いて全て新派劇「当世青松葉」であった。渡辺霞亭が小説「青松葉」を書いた本来の目的は、渡辺新左衛門の名誉の回復であった。だが、小説をその

まま上演したものは、観客には受けなかったのである。

一九〇五年一一月、『大阪朝日新聞』で活躍していた渡辺霞亭の「青松葉」が弁天座と角座で上演されたのとまったく同じ時期に、『大阪毎日新聞』に小説を連載し人気を博していた菊池幽芳の作品が朝日座と角座で上演されていた。角座では菊池幽芳の「己が罪」、朝日座では菊池の「夏子」が上演されていた。「己が罪」と「夏子」はいずれも、『大阪毎日新聞』に連載された小説だったので、同紙はこの二つの作品の劇評を掲載し、朝日座と角座の人気が菊池の作品の上演によるものと述べていた。これに対して、『大阪朝日新聞』には弁天座と角座の「青松葉」の比較評が掲載され、前に記したように、「角座の脚本は出来るだけ原作の筋に拠らん」としているが、弁天座は「小説の精神精髄を没却」と記し、脚本の問題点を指摘しつつも、大入の人気を得ていると述べていた。『大阪毎日新聞』と『大阪朝日新聞』は、それぞれ自紙に連載した作品を宣伝する形で劇評を掲載していたのである。

一九〇五年暮れの道頓堀は、『大阪朝日新聞』対『大阪毎日新聞』の宣伝合戦の効果もあって、一時的には大変盛り上がった。前掲『近代歌舞伎年表大阪編』第四巻によると、「青松葉」は一九〇五年一一月から一九〇六年一月までの三カ月の間に一〇回上演されており、一九〇七年五月にも弥生座で上演されているが、それ以降の上演は無く、息の長い作品にはなり得なかったようである。[41]

おわりに

明治一〇年代後半から二〇年代にかけて、演劇界では演劇改良が盛んに叫ばれた。一八八六年（明治一九）八月、東京で演劇改良会が発足し、大阪でも府会議員安井健次が発起人となって演劇改良会が発足した。会員には中村宗十郎や宇田川文海、久保田米遷ら俳優、文人などがいた。[42]『朝日新聞』一八八六年九月二九日付の「大阪演劇改良会」には、「去廿五日安井健治扇谷五兵衛等の諸氏が南歌楼に会し相談会を開きしに出席の諸氏は何も賛成にて愈よ改良会を起すことに決したるよし」と記されている。一八八七年八月には浪華演劇改良会社が戎座に設立され、創立事務所を「南区西櫓町七十六番地」に置いた。同社は演劇改良を達成する目的で設立された。「改良の用に供する劇場」を「戎座」にし、「旧来の建造物に何程か修繕を施し欧米の人来りて観劇をなすも装飾其他曾て恥づることなき様にする」としている。[43]

戎座はこの後すぐに改築され、浪花座と改称された。演劇内容の改良については、猥褻性、残虐性の排除が盛んに劇評などで取り上げられた。写実を重視し、時代考証をして衣装を整えたり、小道具に「正真の桜樹に造花をさし添へ」たりした。[44]演劇改良運動の中心的存在であった中村宗十郎が一八八九年に死亡し、演劇改良運動は廃れたとされているが、写実主義や猥褻性、残虐性の排除という点ではこの後も二〇年代を通して課題とされており、劇評にも度々登場している。一八九一年六月一七日付『大阪朝日新聞』「芝居廻り（一）」には、「ぬめら〳〵としたる濡幕を根限りぬめらして浮気娘に媚び控目にしてす

ら目も当てられぬ人殺しや幽霊の場をむごたらしい事の有丈仕尽して追込連の機嫌を取るなど沙汰の限り言語道断の所作何処の座にても皆な然る者の如し」と記載されている。また、『大阪朝日新聞』一八九四年七月一一日付に掲載された藤の家主人執筆の「角座劇評（下）」には、「毘沙門裏の殺しに本雨を使ひのり紅を浴ての大立ち廻り凄じなんど云ん方なしされどかゝる残酷極る惨劇を演ぜずとも見物の頭はそれほどに鈍からずよし見物は悦ぶとも風紀に害あるを想へ」という記述がみられる。

明治二〇年代の大阪では、新聞小説の上演はますます盛んになっていった。また、新聞の報道内容を上演することも人気を呼び、一時的に一つの演目が大流行することもあった。

『大阪朝日新聞』一八九二年七月六日付の「弁天座の切狂言」によると、「道頓堀五座の内に近ごろ吾社の続物たえたるときなく」と報じられていて、新聞小説の上演が定番化していたことがわかる。『朝日新聞』一八八八年一二月二二日付には、「狂言作者竹柴諺蔵同歌女助同彦助（中略）等の著作せし芸題百二十一種は脚本楽譜条例に依り予て出願なし居たるが」、「其内吾新聞の小説を脚本としたるもの二十三種其他の新聞より取りしもの四種にて余は小説本より取りて脚本となしたるものなり」と記されており、小説を題材にして書かれた脚本が数多くあったことがわかる。

新聞で報道された三面記事は、すぐに上演されていた。たとえば、一八九三年五月二五日に河内で発生した殺人事件は、「河内の十人殺し」として『大阪朝日新聞』五月二七日付欄外で報じられ、その後も連日新聞紙上で取り上げられた。この事件を題材にした芝居が、同年六月から七月にかけて浪花座、中座、弁天座、朝日座などで上演された。『大阪朝日新聞』同年六月二四日付によると、特に浪花座の角藤定憲一座は「初日を待ち兼ね割れるほどに入り」、「立廻りは素よりメチヤ〳〵の掴み合にて真実の烟盆を蹴返すなどこゝらが壮士演劇の特色にて見物の受よく」、「俳優の芸は二の次にして唯おもろい〳〵の向正面連中ワイ〳〵いふて嬉しがれ」といった状況であった。一八九四年九月には、全国的に日清戦争物の上演が人気を博すが、大阪の道頓堀でも「日清事件報告美談」、「勝軍」、「大日本勝利」、「祝全勝」、「日清戦争大日本帝国大勝利」などが上演され、『大阪朝日新聞』同年一〇月五日付では、「此頃の流行とて芝居も俄狂言も観覧物も兎角日清事件の臭せねば見物人が来ぬ」とまで言われたほどであった。各座ともに写実を重視し、弁天座では「一番目牙山戦争の場に出る日本兵士を勤むる大部屋連中」は「予備下士官を教師に頼み」、「兵式調練をして居る様子は全（まる）で徴兵に出たると違はず」と、本当の訓練さながらの稽古を行った[45]。中村鴈治郎は「本鉄砲の討死を見せたいとの凝り性から昨今花火屋を雇つて」、「火薬の使用法を研究」していた。このような写実性を重視した演出が各座で行われた[46]。

また、明治二〇年代には新しい客層が出てきた。『大阪朝日新聞』一八九二年四月一六日付には、「劇場（しばい）総見物　今十六日堂島紡績所の職員を始め職工一同凡そ八百名慰労のため道頓堀中の劇場を見物するよし」と報じられている。一八八五年一二月に北区堂島浜通三丁目に創業した堂島紡績所の職工が、社内行事として見物に訪れていた[47]。演目の好みや観客層は、社会の動きに敏感に反応して変化していたのである。

明治二〇年代は、大阪が大きく変化した時期であった。企業勃興期を経て産業革命が進み、町には紡績工場が多数創業し、日清戦争を経てさらに工業が発達していった。町並みはまだ旧時代の面影を残しながらも、新しい時代へと突き進んでいた時期であった。古いものが捨て去られ、新しいものが歓迎され近代化が進む中で、宇田川文海の「勤王佐幕巷説二葉松」が上演され、めまぐるしく変化し近代化していく社会の中で人気を保ち続けたのである。一方、同じ『大阪朝日新聞』で人気小説家として作品を発表していた渡辺霞亭の「青松葉」は、「巷説二葉松」ほどの人気を得ることはできなかった。小説連載中に角座や弁天座などで上演が始まったため、脚本が不完全であると評されていた。当時流行していた新派劇に書きなおされ、一時的に好評を博すが、上演が続くことはなかった。

宇田川の小説は、御家物という古臭いスタイルをとりつつも、明治維新を起点とする近代化を庶民の視線で肯定していた。彼の小説をもとにした芝居は、舞台装置の華やかさとあいまって、近代社会成立期の都市の人びとの心を引きつけたのであった。

注

（1）宇田川文海の経歴や新聞記者としての思想や行動については、大谷渡『菅野スガと石上露子』（東方出版刊、一九八九年五月）、大谷渡『教派神道と近代日本―天理教の史的考察―』（東方出版刊、一九九二年二月）で明らかにされており、本稿の宇田川に関する経歴は、これに沿って記している。右の二著では、自由民権運動、次いでキリスト教、さらには初期社会主義に関心を示した宇田川文海の思想が、詳細に明らかにされている。

（2）宇田川文海は、住居を一八八四年（明治一七）一〇月瓦町二丁目に置き、その後釣鐘町二丁目、高麗橋三丁目、北浜五丁目、高麗橋四丁目、道修町二丁目等北船場で何度も転居を繰り返していた。船場は、道頓堀の芝居を支えた商家が立ち並んでいた場所である。彼は、明治一七年創刊の『演劇新報』第一号（駸々堂刊、一八八四年三月）の発行に携り、その創刊号に序文を寄せている。また、演劇改良運動が盛んになった明治二〇年代初頭に、中村宗十郎らとともに演劇改良会に加わっており、演劇にも関心が深かった。

（3）『明治文学全集2　明治開化期文学全集（二）』（筑摩書房刊、一九六七年六月）。

（4）「宇田川文海作『勤王佐幕巷説二葉松』について―明治初期の〝つづき物〟の世界―」（『学苑』第四〇九号、一九七四年一月）。

（5）伊原青々園「新聞小説の変遷」（『早稲田文学』金尾文淵堂刊、一九〇七年四月）。青々園は別号で、本名は伊原敏郎である。

（6）昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第三十一巻（昭和女子大学光葉会刊、一九六九年）は、国文学の立場から宇田川文海の生い立ちや著作物、資料などを明らかにしているものである。

（7）伊原青々園「大阪の俳優と新聞小説」（『道頓堀』第一四四号、一九三八年一一月刊）。

（8）『演劇新報』は、一八八四年（明治一七）三月に創刊し、一八八五年七月発刊の第二五号まで発行されている。関西大学や国立文楽劇場などにあり、それを閲覧した。

（9）森西真弓「観客の視点（二）―演劇雑誌」（『歌舞伎文化の諸相』岩波講座歌舞伎・文楽第四巻、岩波書店刊、一九九八年一〇月）によると、『劇場珍報』は、それ以前に出ていた『劇場の脚色』を改題したもので一八七八年（明治一一）八月に創刊された。一八八四年（明治一七）四月（一五〇号）まで発行され、一八八四年九月から翌年三月まで発行された再刊一号から九号までが関西大学や国立文楽劇場などにあり、それらを閲覧した。

（10）森西真弓「観客の視点（二）―演劇雑誌」によると、『大阪演劇詳

報』は、一八九一年（明治二四）五月に創刊され、三六号まで発行された。三〇号までが関西大学図書館にあり、それを閲覧した。

(11) 国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表大阪編』第一巻～第六巻（八木書店刊、一九八六年三月～一九九一年三月）なお、本稿での芝居興行の日付、出演俳優は同書による。別途参考にしたものは、注などに記した。『近代歌舞伎年表大阪編』は、「各種番付、筋書、記録文献（新聞・雑誌・単行本）、あるいは個人作成の興行資料などを使用した」とあり、『浪花新聞』、『大阪新報』、『大阪日報』、『日本立憲政党新聞』、『朝日新聞』、『大阪朝日新聞』、『大阪毎日新聞』などの新聞、『松竹関西演劇誌』、『大阪歌舞伎外題年代』、『明治演劇史』、『大阪歌舞伎新報』、『演劇珍報』、『芝居道楽』などの雑誌や書籍が「主な参考文献・新聞」欄に挙げられている。

(12) 本稿では、初出である『朝日新聞』一八八三年（明治一六）一〇月一六日から一八八四年（明治一七）一月二五日までを使用した。「勤王佐幕巷説二葉松」は、同名で一八八四年一月八日に初編が、同年二月に二編が出版されている。同年三月五日付『朝日新聞』には「勤王佐幕二葉松（上下弐冊読切）の綴本を心斎橋駸々堂より売出し」という記事が掲載され、同日広告欄にも「本日売出し」と記載されている。その後一八八八年（明治二一）七月にも駸々堂から『勤王佐幕巷説二葉松』が出版されている。『朝日新聞』連載時は無記名だが、その後の出版物から、著者が宇田川文海であることがわかる。

(13) 「勤王佐幕巷説二葉松」では、題材となった藩の名前を「書中藩名と地名とは憚る所あるよしにて之を漏せるに付遺憾」（『朝日新聞』一八八三年一〇月一六日付）として伏せているが、『東京新誌』第三号（従吾所好社刊、一九二六年一〇月一五日）に宇田川自身が次のように記している。

小生の処女作か、又は得意の作の題名御尋ねに預り、実に汗顔の仕合に御座候、小生が小説らしきものとして世に出し候は、『巷説二葉松』と申す題名にて、維新の際名古屋藩の勤王、佐幕両党の争ひを根拠としてつゞりしものに御座候

同小説の題材になった文献は、『朝日新聞』一八八三年（明治一六）一〇月一六日付に「此原稿は投書に係り」記したとされている。しかし、宇田川文海『勤王佐幕巷説二葉松』初編（駸々堂刊、一八八四年一月八日）によると、「此原稿は或人の身実記を経て筆記せるもの」とされており、投書から実記へと変更されている。これ以前に出版された青松葉事件を題材にした小説などはみあたらず、宇田川が何を参考にしたのかはわからない。

(14) 『新修名古屋市史』第四巻、一九九九年。

(15) 『朝日新聞』一八八三年（明治一六）一〇月一七日付、一〇月一九日付。

(16) 『朝日新聞』一八八三年一一月二三日付。

(17) 『朝日新聞』一八八三年一一月二七日付。

(18) 『朝日新聞』一八八四年（明治一七）一月二〇日付。

(19) 『朝日新聞』一八八三年一一月二二日付。

(20) 『朝日新聞』で一八八四年一一月七日から一八八五年三月一日まで連載。

(21) 『朝日新聞』一八八三年一一月二二日付。

(22) 前掲『新修名古屋市史』第四巻。

(23) なぜ「若緑」という名が付いたのかはわからないが、「若緑二葉松」という言葉が最初に『朝日新聞』紙上に登場するのは、一八八四年（明治一七）三月二二日付に掲載された『演劇新報』第一号（駸々堂刊、一八八四年三月）の広告であった。『演劇新報』第一号は、一冊全てが「若緑二葉松」の筋書きで構成されている。同誌の宇田川文海の「序詞（じょし）」には、「演劇の根本と世に称へらるゝ吾大阪にして是に関する雑誌なきハ一の欠事なりと平素遺憾の事に思ひをりし」とあり、「俄に発起して此演劇新報を刊行す」と記されている。

(24) 『劇場俳優人名番付』第一六〇号、玉置清七版元、一八八四年三月発行。なお、何代目であるかは『新訂増補歌舞伎人名事典』（日外アソシエーツ刊、二〇〇二年六月）を参照した。伊原敏郎『歌舞伎年表』

第七巻（岩波書店刊、一九六二年）によると、「明治一七年度」の俳優の等級は、一等が実川延若、嵐璃寛、中村宗十郎、嵐橘三郎、市川荒五郎などであった。実川延三郎は二等であった。等級は、俳優の一年間の収入によって決定されていた。

(25) 「若緑二葉松」の戎座上演時、筋書きを記載した『演劇新報』第一号（駸々堂刊、一八八四年三月）、『劇場珍報』（華本文昌堂刊、一八八四年四月）が発行された。『劇場珍報』には筆者の名前が記されていないが、『演劇新報』には、「当夷座二の替筋書勝能進報」と記されている。後に発行された勝諺蔵『演劇脚本　勤王佐幕若緑二葉松自大序至大詰』（新実八郎兵衛刊、一八九六年三月一六日）では筆者は勝諺蔵とされている。『明治大正大阪市史』第一巻（一九三四年刊）には、「明治五年には東京より河竹黙阿弥の高弟勝諺蔵及勝彦輔の父子が大阪に迎へられた。」とあり、勝諺蔵は「その後能進と改称、中座及浪花座の立作者として多くの新作脚本を作り」、「新聞の所謂「続き物」を多く脚色した」と記されている。さらに、「その後彦輔は父の諺蔵を襲名し、角座の立作者として数多の新脚本を発表した。」とも記されている。また、伊原敏郎『明治演劇史』（早稲田大学出版部刊、一九三三年）では、勝能進が「下阪」して間もなく「倅の彦輔（後に諺蔵）も後を追うて来たので、父子が盛んに合作して劇場に供給し、大かたそれが世尚に投じたので、延若や宗十郎をはじめ、俳優や興行主たちに信頼され、京阪の劇壇に勝派と称する作者道の王国を出現するようになつた。」とされており、父子の合作としての著作目録に「若緑二葉松」が記載されている。『劇場俳優人名番付』第一六〇号の「若緑二葉松」の作者に勝能進と勝諺蔵の名があることからも、これも父子の合作の一つであったことがわかる。

(26) 『朝日新聞』一八八四年三月二七日付。

(27) 『朝日新聞』一八八四年四月一〇日付。

(28) 『朝日新聞』、『日本立憲政党新聞』、『演劇新報』、『劇場珍報』、『歌舞伎新報』には戎座での「若緑二葉松」が、何日まで興行されていたのかという記述がなく、前掲『近代歌舞伎年表大阪編』にも記載されていない。しかし、『朝日新聞』一八八四年（明治一七）五月一三日付に「去る十日中劇場初日の景況は狂言と電気灯と両ら評好れバ就中景気好く殊に切狂言のお申は戎座の二葉松に負ぬやうと一座競て身を入れ稽古に力を尽せし故にや（中略）真に迫て面白かりし」と記載されており、三月二七日に始まってから五月一〇日にはまだ続いていたと推測される。『大阪朝日新聞』一九〇九年（明治四二）四月二一日の「中座の「二葉松」（上）」には、次のような記述がある。

「巷説二葉松」は廿五年前の本紙に掲げて空前の喝采を得たる小説なり、新聞小説を大歌舞伎の舞台に出したるもこれが始めなれば市中の人気湧くが如く六十余日割れる如き大入を取りたる芽出度き歴史あれば、新聞物といふと多く一芝居の短き命なるにこの「二葉松」のみは幾度も繰り返されて幾度も大入を取る、お家物と一口にはけなせど長き生命を持続するには、何処かに好き処あるは理の当然なり

(29) 『劇場珍報』は、「此場ハ本文の第五十二三両齣の眼目を見せる」としているが、この場面が五二、五三齣であるのは出版された『勤王佐幕巷説二葉松』のほうで、『朝日新聞』に掲載されたものでは、五五、五六齣に当たる。

(30) 前掲『演劇脚本勤王佐幕若緑二葉松自大序至大詰』、『演劇新報』第一号、『劇場珍報』を確認したところ、この三冊では内容に大きな違いは見られなかった。勝諺蔵の『勤王佐幕巷説二葉松』は脚本で、その他の二つは筋書きであるという性格上の違いはあったが、台詞の内容、話の筋、場面ともにほぼ同じ内容が記されていた。

(31) 『大阪朝日新聞』一八九三年（明治二六）五月四日付「俳優の等級」によると片岡我童が一等、中村福助が一等、片岡我蔵は四等、嵐巌笑が二等、中村鴈治郎が一等、尾上多見之助が二等であった。一等二等で主要な役どころが占められていることがわかる。なお、一八八五年（明治一八）に実川延若が、一八八九年（明治二二）に中村宗十郎が死亡した後、道頓堀では片岡我当、中村鴈治郎が後継者と

して名を馳せていた。『大阪朝日新聞』一八九三年三月五日付によると、明治二六年度は、一年間の収入が五百円以上が一等、四百円以上が二等、三百円以上が三等、二百円以上が四等、百五十円以上が五等であった。

(32) この劇評は、前掲『近代文学研究叢書』第二五巻の渡辺霞亭の「著作年表」には記されていない。

(33) 前掲『近代文学研究叢書』第二五巻による。

(34) 水谷盛光『尾張徳川家明治維新内紛秘史考説』(水谷盛光刊、一九七一年)。

(35) 本稿では、『大阪朝日新聞』一九〇五年七月一三日から同年一一月九日までを使用した。

(36) 『大阪朝日新聞』一九〇五年八月一八日付。

(37) 前掲『近代歌舞伎年表大阪編』第三巻。

(38) 『大阪朝日新聞』一九〇五年(明治三八)一一月一三日付。

(39) 『大阪朝日新聞』一九〇五年一一月一九日付。

(40) 前掲『明治大正大阪市史』。

(41) 前掲『近代歌舞伎年表大阪編』第四巻。

(42) 『大阪百年史』(大阪府刊、一九六八年一〇月)。

(43) 『朝日新聞』一八八七年(明治二〇)八月六日付。

(44) 『朝日新聞』一八八七年一月二九日付。

(45) 『大阪朝日新聞』一八九四年(明治二七)一〇月九日付。

(46) 『大阪朝日新聞』一八九四年一〇月四日付。

(47) 『新修大阪市史』第五巻(大阪市刊、一九九一年三月)。

(関西大学大学院文学研究科・博士課程前期課程)